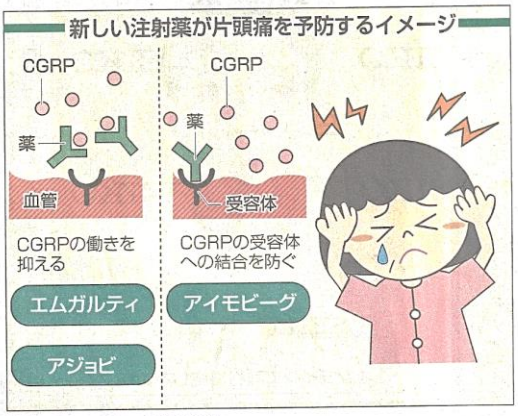
つらい片頭痛 注射で防ぐ

つらくて仕事に集中できなかったり、寝込んでしまったり…。日常生活への支障の大きい片頭痛に、痛みの発生を予防する注射薬が2021年から新たに登場している。これまでの対症療法がなかなか効かなかった人でも、片頭痛の頻度を減らす効果が確認できており、期待が高まっている。（衣川圭）



グラフィック・米家満樹

原因物質狙う新治療薬登場

目の奥がぎゅーと締め付けられ、後頭部はどくんどくんと脈打つ。そんな痛みに毎日のように悩まされてきた広島市安芸区の学校職員山田葵さん(40)は「注射薬の治療を始めて、週5日の仕事に就くことができた。痛みのある日をゼロにはできないけれど、ちょっと我慢したら乗り切れる自信が付きました」と喜ぶ。

昨年6月、中区の土井内科神経内科クリニックで注射薬エムガルティの治療を始めた。月1本の注射の痛みは今も慣れないが、多い時期には月に25日、痛み止めの薬を飲んでいたのが、5～8日まで減ったという。痛みが出ても少し時間がたてば消え、何も手につかずに寝込んでしまうことはなくなった。

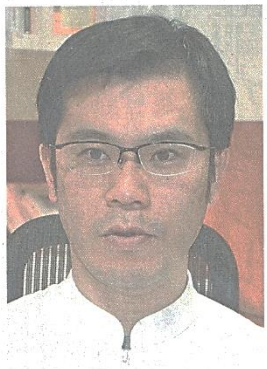
国内で昨年4月以降に使えるようになった健康保険適用の注射薬はエムガルティのほかに、アジョビとアイモビーグの計3種類。いずれも、片頭痛を引き起こす原因とされる「CGRP」という物質を狙った薬剤だ。CGRPは、何らかの刺激を受けた脳内の神経から放出され、血管壁の受容体と結合すると、血管が拡張し、炎症を引き起こす。炎症物質が神経を刺激し続け、激しい痛みとなるとみられる。

エムガルティとアジョビはCGRPとくっついて働きを抑え、アイモビーグは受容体と結合することで、片頭痛を予防する。頭痛の診療ガイドラインの改定にも関わった土井光院長(47)は「従来の薬は痛みの出た後に対処するものが中心で、既存の予防薬が効かない人も多くいました。新しい薬は、改善を諦めていた人にも効果がみられます」と話す。

月に15日未満の反復性頭痛の患者を対象にした製薬会社の治験では、半年間でおおむね半数の人が月間の頭痛回数が半分に減り、4人に1人は4分の1に、10人に1人はゼロになった。土井院長が患者に使った効果もほぼ同様で、1年の使用ではさらに効果が上がるとみている。副作用は、注射に伴うかゆみや痛さが中心で、重篤なケースは現時点ではほとんどないという。

新しい注射薬の対象は18歳以上。月4日以上の片頭痛があり、従来の治療で十分に効果が得られていない場合に使用できる。妊娠中や授乳中の女性は基本的に使わない。

課題は値段の高さだ。三つの注射薬はいずれも1本当たりの価格が4万円を超し、自己負担が3割の人だと、毎月1万円以上の治療費がかかる。米国などではCGRPを狙った比較的安価な飲み薬も出ている。日本でも一部は治験中で、数年内には使えるようになる可能性もあるという。



「片頭痛には新しい薬が次々と出ているので、治療を諦めないでほしい」と話す土井院長

どんな病気？

「どくんどくん」が典型／30代女性 5人に1人

片頭痛とはどんな病気なのだろう。15歳以上の日本人の8.4%が片頭痛持ちというデータがある。女性は男性の約3倍で、特に30代の女性は5人に1人が発症するとされる。

片側だけに痛みが現れるのは約6割で、両側が痛むことも少なくない。どくんどくんという拍動性の頭痛が典型的だが、締め付けられるような痛みが出ることもある。音や光、においなどの刺激に過敏になったり、動くと痛みが増すためおじぎができなかったりする人がいる。片頭痛の前症状としてあくびなどが出ることがある。

片頭痛を引き起こす原因は人それぞれ。ストレスや寝不足、女性では生理などがきっかけになる。雨が降る前に出やすい人もいて、トンガの火山噴火による気圧変動が引き金になった人もいるという。遺伝的な側面もある。

頭痛頻度が月2、3日で市販薬で治まるなら、家で様子をみてもいい。月10日以上起きたり、回数が少なくても市販薬が効かない場合は、頭痛専門医のいる医療機関に相談しよう。受診時には、頭痛に伴う吐き気などの症状を伝えることも重要だ。

繰り返し起きるタイプの頭痛にはほかに、頭が締め付けられるように痛む緊張型頭痛、目の奥に強い痛みが起こる群発頭痛などがある。突然襲われる頭痛の場合は、脳出血などの恐れもあるので、脳神経外科や救急外来を受診しよう。

「片頭痛の新規発症抑制薬について」

院長の取材記事が掲載されました.

中国新聞 朝刊 (2022 年 2 月 23 日)

DOI CLINIC
土井内科神経内科クリニック